

ヴィラ・マーヤ便り

知と文明のフォーラム ニュースレター

2008 04 19

No.1



画・RYOKU YONEKAWA

座談会

「現代社会をどうみるか」

出席者（知と文明のフォーラム運営委員）
青木やよひ（評論）、大束愛子（編集）、片岡
みい子（翻訳・ライター）、片桐祐（フラン
ス文学）、北沢方邦（構造人類学）、杉山直子
（アメリカ文学）、徳武智栄（杏工房）、森淳
二（事務局）、吉田乙恵（鍼灸）

格差社会をどうするか

青木 「丸山真男」をひっぱたきたい」（赤木智弘）という文章が話題になっていますが、先日この人が毎日新聞の対談にでているのを読みました。彼は自分自身の体験から、日本の知識人が長い間、フリーターを労働意欲に欠ける特殊な存在としか認めてこなかったことに怒りを感じている。しかも現在そういう層が何十万人にもなっていて、固定化してしまっている。自分もそういう固定化した格差社会を変えたいと思うが、どうにもならない。自分が浮きあがれないなら、社会を掻き回して周りを低くして平等を獲得するしかない。それには戦争だ。戦争になれば、丸山真男でさえ上等兵にひっぱたかれる。軍隊にはある種の平等があるだけ今よりも

しだ、と彼は思っているようです。

それに、少なくとも社会から要請されて軍隊に入るということは、必要とされる人間としてのアイデンティティがえられる、自己の尊厳を回復できる、だから戦争待望論なのだという。そして現在の生ぬるいヒューマニズムをほびこらせたその象徴が、彼にとっては丸山真男なんでしょう。

戦後民主主義のヒューマニズムっぽい偽善性に苛立ちをおぼえる気持ちは、私にもわかる。だけどその解決が戦争だっていうのは、凄くショッキングでした。戦争体験者の私からみると、軍隊や戦争の認識にとんでもない誤解があるからだと思いますが、でも今の若い人たちはわりと乗っちゃうんじゃないかと。その辺、皆さんはどんな風に考えているか、聞きたいと前から思っていました。

杉山 格差の拡大に対して何の手も打てなかった、というリベラリズムへの失望ですね。丸山真男に代表されるようなインテリは自分たちは困っていないので、「戦争でもないことにはどん底から抜けれない」と思っている人の立場が分かっていないという苛立ちなのでしょう。

森 丸山に代表される戦後知識人が生み出した思想が、現実を変える力を持ちえていないというのは残念なことですが。

青木 一九六〇年代の全共闘がすでにその問題をつきつけているんです。でもいまそれを突破する方向が、なぜ社会変革や異業申し立てでなく戦争になっちゃうのか。それほど閉塞感が強く絶望的になっているということでしょうね。

杉山 周囲も自分のようにメチャクチャになればいい、という感情です。戦争が、いわば「負の平等」のようなものをもたらすと誤解している人は、国民全体が困窮して、国全体が焼け野原になったというようなイメージを持っていると思います。でも実際は戦争中でも生活に不自由したわけでなく、「負けたのが悔しい」という国粋主義的な感情を持ち越している層というのはかなりいる。今度戦争があってもやはり今の社会の格差は持ち越されていきます。第二次世界大戦よりさらにひどい格差かもしれない。戦争中は本当はこうだったという情報が、もといきわたらなければいけないと感じます。

片桐 平等幻想はかつてもあったようです。二等兵だった私の親父から繰り返し聞かされたことばですが、村の人々は「みんな同じ二等兵じゃ」といつて喜んで召集されていたと。「陛下の赤子」というおまじないが平等の共同幻想に一役買っていたのでしょう。軍隊ほど厳然たるヒエラルキーの組織はないはずなのに…。

杉山 丸山のような中産階級で高学歴のインテリでも、「兵卒になれば殴られる」という「平等」が、戦争になれば達成されるという誤解があります。

森 今の競争社会では、国内的にも国際的にも優勝劣敗ですね。いわゆる助け合いとか共生といった言葉が力を持ちえない。グローバル社会の中で、共生が成り立つ可能性があるのでしょうか。

世界的にみて、社会主義の国はもうほとんどありません。中国は社会主義といえながら、普

通の資本主義社会より、さらにひどくなっている。本来社会主義の理念は、共生であり平等であったはずですが。

青木 でも社会主義の理想がどれだけ現実をよく変えたかは疑問ですね。東西の壁が崩れる直前くらいに私がみた東側諸国の実態はともそうはいえなかった。西側諸国の方が公害や環境問題にセンチティブで、まだ救いがあると、緑の党の友人がいつていた。もし社会主義が生きていても、共生や平等はおろか、環境問題でさ

column

文明 再考

人間の不幸のひとつは、「能力」に差があることである。能力といってもさまざまだし、必ずしも固定的なものではないけれども、差が存在することは否定できない。そして能力は、しばしば権力や金力に結びつく。一方、その差にかかわらず、人は「幸福」（この言葉も多様ではあるのだが）に生きる権利がある。文明の進歩とは、つまるところ、この矛盾をどう埋めるかということではないかと思ふ。

現代文明の最先端国であるアメリカをこの観点から見ると、「進歩」からは著しく取り残されていると思わざるを得ない。重い病に苦しんでいるながら、お金がないために病院から放り出されるというアメリカの実態を、マイケル・ムーアは『シッコ』という映画で冷徹に描いている。金を得る能力が、ほとんど無制限に放置されているのである。

「自由」の概念もふくめて、「文明」について、私たちはもう一度根本的に考え直す必要があるのではないだろうか。（森）

えよくなったかどうかわからない。中国をみればわかるけど、「社会主義の大義」のために何があっても経済成長を遂げねばならない。

森 今、全世界が同じような状況になっている。赤木さんはそのなかでの労働のありかたを問うているんでしょうけどね。

片岡 働く場所がどんどんなくなっていくのが一番辛いですね。安い労働力が外から入ってきて、物売るにしても世界の金持ち相手。日本人は働くことも消費もできなくなる。

好きでフリーターやってない。尊厳が得られる働き口が必要なのです。それなのに政治は、英語の勉強や資格をとれといった予算しか組まない。そんな就労支援なんて意味あるのかと思ふ。

杉山 周囲の人の話を聞いていても、労働条件が悪すぎます。正社員の仕事量は増える一方で、残業も転勤もただ働きも当たり前。正社員を減らした分をカバーするのは「派遣さん」ですが、三年以上雇うと権利が発生するので、三年未満で雇い止めにします。仕事を覚えたところで新人に入れ替えなので、能率も悪いし給料も安い。どちらかしかない、ならいっそ戦争になれば、という気持ちになってしまうということでしょうか。

豊かさとは何か

森 大東さんは今の社会状況をどうとらえていらっしゃるんですか。

大東 バブル期、一億総中流といわれて、社会

子にはひとつもありませんでした。荷宮和子が『若者はなぜ怒らなくなったのか』という本の中で、最近の就職難は、一部の男子が女子並みになったということだと書いているのですが、そちらのほうが私の実感に近いです。

青木 ドイツやフランスでは若者の失業率の増大が二十年もまえから問題となっていて、ヴェールホフというオーストリアの女性の社会学者が男性の主婦化ということをいつていた。それが二十年遅れて日本にきています。ほんとにいったら男性の中流になれない人たちと、潜在的な主婦や職場から排除されている人たち

は同じ条件で闘える、連帯感が持てる世代じゃないのか。そういう風に考えることもできるのではないかと思います。男性も女性並みになったこと。

森 いずれにしても、豊かさとは何か

ポイントですね。大東 GNP（国民総生産）でなく、ブータンの国王が提唱したという、GNH（国民総幸福度）という概念は、もうひとつの豊かさを考えたときわかりやすいのでは。ブータンは森林に囲まれた農業国で、ほぼ九割の人が「幸福だ」と満足しているとか。

杉山 でも今の日本の若者がブータンに行ったら、やはり「これではいやだ」と思うのではないのでしょうか。大東 今の若者には、流行の商品を買って、おしゃれやグルメを楽しみたいという人たちと、農業や自然エネルギーに興味があるエコ派の二種類がいるみたいですね。

column

インドの闇

十五年以上前になるが、ツアーで二週間インド旅行をしたことがある。

夜、何百メートルおきかに、微かに点っている裸電球。その薄暗い電球のもとにうごめく人々の影。私は、インドの街の闇の深さと濃さの中に、何か救いのようなものを感じていた。すでに、そのころの私は、あの闇を抱えるための精神の強さも、体力も、持っていなかったけれど。

今、私は、ニュータワンの団地で暮らしている。無用の用などと生意気なことをいつていたころの混沌とした感覚は忘れてしまい、蛍光灯にこうこうと照らされて、スピードと効率で埋まっているような毎日を送っている。

この「知と文明のフォーラム」に私のようなものが籍を置いているのは、その闇を、少しでも取り戻したいからである。（徳武）

主義がやれなかったことを日本は達成したと他国からも評価されたことがあって、私は、なんとはなしにその余禄がまだ継続しているような意識があった。そうではなかったのだ、ということはこの赤木さんや『生きさせろ！ 難民化する若者たち』などの著作のある両宮処凛さんの話を聞いてわかりました。赤木さんの説を聞いたときには、個人的にはむかつくものがあった。倫理観がない。昔だったら普通にもつていた人間性みたいなものがない。そんな人の著作を時間かけて読む気分にはなれなかった。でも、あの年代の人たちはバブル崩壊のツケをモロに受けて、超就職氷河期に社会にでて、不安定な派遣労働をするか過労死寸前の正社員になるしかなかった。ネットカフェ難民になれば、デートに誘う電話代すらなく「毎日が生き延びるための戦争」と両宮さんは話していました。ただ彼女は、そうしたワーキングプアを輩出した背景に、経済のグローバル化という構造の問題があることに気付くようになってきたと語っていました。

敗戦の飢えを体験した世代は、まずお腹一杯食べたいからとモローツに働き、経済成長を達成し、豊かになった。労働組合もパイの分け前を求め、豊かさを求めた点では同じ。そのツケが今、きている。何が豊かなのか、その価値観をどこかで間違えちゃったような。

杉山 「バブルのころは今のようない実感がなかった」とおっしゃるのは興味深いです。私が就職年齢だった一九八四年はバブルの真っ最中で、男子の就職はとてよかったです。女

親掛かりでいられた。親が高齢化して急に社会問題化した。介護の問題もそうだし。

森 この格差社会での苛立ちを解消するため、今の若者はどんなイメージを持っているのでしょうか。

杉山 戦争のイメージもないですが、明るい社会のイメージもないようです。

青木 だって、持ちようがない。環境の専門家たちが二〇五〇年になつたらこういう変化が起こるであろうといっていた自然の変化が、すでに起きている。まだ遠くの話と思っているんだけど、あつと気がついたときはもう遅いんじゃないかって。感受性の強い子供たちだったら虚無感がつるだけ。

森 日本の子供たちの不幸感はかなり高いようです。オランダあるいは北欧の国の子供たちのありようは随分違い、将来に対して、日本の子供たちのような絶望的な感情をもっていない。オランダの教育の基本は、自律性、多様性、それに社会性です。教育方法にはグループ学習も取り入れられている。そこでは、できない子のできる子が教えるということもあるようです。方法的に、助け合いという理念が明確にあるように思います。

杉山 グループ学習は日本でも六〇年代から七〇年代にかけて流行り、私が小学生のときには「班活動」「班学習」がさかんでした。ソ連の「集団主義教育」がモデルだったのだと思います。私も子供のときに読んで面白かった『ミーチャと学校友達』（岩波子供の本）のような教育が理想とされたのではないのでしょうか。今は当時

を守りながら、どうやって大人の意識を変え、ひいては社会を変えていくかがこれからの課題です。

いままでの戦後民主主義は、みなさんがおっしゃったように、この状況に無力です。なぜならそれは、グローバルズムを推進する新自由主義と同じ合理主義や近代文明の土俵で闘っているのにすぎないからです。ナシヨナリズムや憲法第九条改正には敏感ですが、ほんとうの闘いの相手を見失っている。グローバルズムをもたらした根本的な原因は近代文明そのものに実は潜んでいる。それを根本的に批判しなくてはならない。またそういう思想のありかたを批判していかないと、われわれの生活も変わらない。知と文明のフォーラムで、なんとかそれを見える形にしていこう、あるいは、そうした志向をもつグループと連携し、新しい知のネットワークをつくって、広げていきたい。

森 グローバル化社会は簡単には変わらない。しかし変えない限り人間の幸福はあり得ない。そのためには、我々を含めて、人々の意識が変わらなければだめだということですね。それを可能とするための材料を提供していくということでしょうか。

北沢 そのためのキーワードは「身体性」です。難しい言葉かもしれないが、近代文明やその合理主義は、精神と身体を完全に分け、身体や物質あるいは自然そのものはすべて人間の精神に奉仕するものです。だから奉仕させるものとして機械や物質レベルの文明が発達する。教育では、身体の教育は体育・保健、またせいぜい家

ほど行われていないようです。

森 オランダの教育はそれとはもちろん違うでしょう。自律性が重んじられ、人はそれぞれユニークであることを教育の出発点にしているようですから。

杉山 日本では、周囲から突出しているといじめられる、という恐怖が強く、学校も建前では個性があつたほうがいいというが、実は横並びを奨励しているところが大きいにあります。

徳武 まだ生まれてきて数年のいたいけな幼稚園生が不釣合いの制服を着ている姿には、涙が出てしまいます。

近代文明の価値観を問う

森 私たちは全世界的な規模のグローバル化社会の中にある。格差はますます拡大し、若い人たちの働く場所がなくなつてきている。苛立ちから戦争待望論まで出てくるありさまです。しかし、現代の知識人は新しい価値観を提示できていない。そこで、知と文明のフォーラムでは、いったい何ができるのでしょうか。

北沢 現在の状況は近代文明の宿命ですね、根本的に。思想的にいえば合理主義。それが産業革命以後は経済合理主義で、資本主義の基本的な論理になり、効率や合理性の観点からすべてが処理される社会になつた。

問題はこういう社会をどう変えていくかですが、グローバルズムの進展はたぶん当分は止められない。ひとつは二酸化炭素排出問題などで「世界環境機構」のような強力な国際機関を創

庭科、あとすべて中心となるのは知育です。

身体性とは、われわれの中の自然であると同時に思考を律しているものです。自然や環境問題を理解するだけではなく、食の問題から科学にいたる人間の文化あるいは人間そのものを根本的に考え直す手があります。人間と生物・無生物など地球全体との関係、さらに宇宙との関係にいたるまで、身体性あるいは自然性をキ

column

はてしない欲望

十二前、『ポストメディア論』を翻訳した折改めて「メディア」「近代」「文明」について考えた。私は教育を受け、故郷を離れて暮らし、国内外を旅し、様々なメディアで世界の出来事を見聞、地球の姿も知っていた。どれも百年前の庶民にはできなかった事だ。ヒト・モノ・カネが世界を廻り、経済効率・利益優先主義で歪みが生じている。だが、後戻りはできない。中国・インドをはじめ、世界の民が冷蔵庫とテレビと車を持つまで大量消費は続く。ガンジーは「地球はそこに住む人々を養うことはできるが、その欲望の全てを満たすことはできない」といったが、ヒトの欲望ははてしなく、制御不能。「近代化が悪い」「昔はよかった」「便利さや贅沢が悪い」「エネルギーは限界」「金儲けは悪徳」と指摘したところで、善悪を問わないポストモダンの現代、大義を打ちたてようがない。アーチスト、J・ホルツァーの警句「PROTECT ME FROM WHAT I WANT」を虚空に向かって叫ぶばかりだ。(片岡)

ることで歯止めをかけることができる。他方は遠回りのようだが、人びとの意識を変えていくしかない。

いま正社員の中でも出世主義が減っている。財界人は嘆かわしいというが、それは人間としての健全な反応です。環境問題についても、子供たちが将来に暗いヴィジョンしかもっていない。子供はセンチティブですから、彼らの感性

column

「ことば」が消えてゆく

絶滅を危惧される生物種はあれほど喧伝されるのに、そのなかにヒトが含まれていることはなぜか見逃されやすい。現在ある六千前後の言語のうち、ほぼ半数が一世紀以内に話し手を失うといわれる。数千年、数万年におよぶ知を集積した「ことば」が消滅しつつあるのだ。録音で残しても、これらの「ことば」は死せる標本でしかなく、他言語への翻訳はおろか、いかなる科学的情報によっても置換できない。文字をもたず、世代から世代へと話し手の肉体とまさしく溶けあつて保存されてきたからだ。

ヒト(言語)の多様性が奪われ、われわれが瘦せ細る一方で、単一的なシステムしか許容しない新・自由・主義が癌のように広がる。その見せかけの便利さに飼い慣らされて、自由と不自由を見分ける感覚を、鈍磨させられるのが恐い。どこでも使えるひとつの言語をもつ効率と、無数の言語が生きている豊かさど、どちらが大切か判断する力を奪われてゆくの怖い。(片岡)

ワードにしてどう考えていくのか。それが近代を超える新しい文明の知となる。

これはまた人類の古い知恵と結びつく。インドの哲学や思想、中国の老荘思想。あるいは近代にあつても異端とされた偉大な芸術家や思想家たち、彼らの知の遺産がそれです。

青木 そういう考え方の対極にいるのが、一九七〇年にアメリカでデビューした女性開放の理論家ファイアストーンなんです。完全な男女平等を実現するには、女性のうちなる自然である生殖を外化すべきだ、つまり命の再生産を人口生殖技術で行うことを提唱している。こうした「徹底した自然の征服」こそが、文明の進歩にとって必要な選択だと主張しているんです。

彼女の著書『性の弁証法』はボーヴォワールに捧げられていますし、ボーヴォワールも彼女を評価しています。日本を含めてボーヴォワール信者は非常に多い。でもあの思想を徹底するとファイアストーンに行き着く可能性がある。そして、現在進められている遺伝子工学と人口生殖技術が結びつくと、人類の品種改良も不可能ではなくなる。これは将来起こりうる人類の悪夢です。

幸い日本の女性解放運動は、最初から身体の問題を、むしろ「自然性の回復」の方向で受けとめていて、ボーヴォワールやファイアストーンとは違う土壌から出てきています。いわば、エコロジカル・フェミニズムの芽がはじめからあつたわけですから、ところで最近女性の間では、エコロジーについての関心はどうですか。

大東 それほど爆発的に変わってはいないので

はないかと思えます。八〇年代以降、パソコンが普及し、そのあとは携帯電話と、文明の利器が次々とできましたし…。世界観が変わらないと駄目ですね。世界観が変わるとパーツと変わるんじゃないかと思う。ISP細胞やクローン牛のような遺伝子組み換え技術のような方向に行くのは進歩史観がまだ強いからではないでしょうか。でも感覚の面では、かなり変わってきたと思います。豊かで便利な生活のために、得たものもあるけれど、喪ったものも大きいということをごどこかで実感する人が増えている気がします。

北沢 感覚的なものが変わると、社会が変わるきっかけになる。女性がいいのは、皮膚感覚や生活感覚で判断する。それを目に見える形で、大東さんがおっしゃるように、世界観を変える方向につなげていければいいのだが。

森 むずかしいのは、私たちが、それこそ近代文明化された生活の中にいるということですね。冷暖房のきいた部屋でパソコンのキーを叩き、はいているジーンズはユニクロ製。ユニクロって、グローバルイズム企業の最先端ですよ。自己矛盾を凄く感じます。

青木 でも、無限に何の反省もなくとりこんでいくか。それとも人間は矛盾のかたまりだから、それを矛盾と感じるような感性が育ってくれば。どこかで足るを知るっていうか、歯止めがかかってくれるのではないのでしょうか。それを助長するような方向づけをしていく。

森 考え方、感じ方を変える方向性を持つことはもちろん重要ですが、生活のレベルで失つが、ハイテクを利用した自給自足は可能です。エネルギーも自給自足できます。

また農村でエタノールを生産し、売ればよい。休耕田を利用してある種の雑草や水藻を栽培する。稲作や野菜も有機農法に変えて輪作する堆肥のプラントを造り、自然エネルギーでまかなう。農村をこう変えれば、少なくとも農や食を中心に消費者もグローバルシジョンに飲み込まれずにすむ。

それからたとえばドイツの風力発電ね。牧場に何基か一台一億円の風力発電装置を設置して。ところがこれが収益を上げて、いまやこちらが本業になり、電力を年間十何億円も電力会社に売っている。

青木 それをやって自分の人生が変わったとっていた。エコロジーはビジネスになる。そういうシステムを作らないといけないわね。

吉田 伊豆の稲取がそう。あそこ風力発電は利益が出てきたらしいです。三基から五基くらいに増やして、山の上でやっています。巨大です、不気味だし。三枚の羽で。真下に一度行ってみてください。

徳武 知と文明で一基作りますか。
吉田 今度見学に行きましょう。自然破壊もあるらしい。

大東 市民ファンドを募集して、市民にお金を投資してもらってつくる。うまくいけば利子年五%。預金率より高い。

片岡 そういうモデルがたくさん出てくると思いますね。

(二〇〇七年十二月八日)

できた共同性、一言でいえば助け合いの精神、これをどう再構築するか、大きな課題です。地域は失われ、家族は崩壊の危機にあります。

青木 まだ地域は難しい。地域は離れていても条件の同じような人たちが、まず結びついて、情報交換をしたり、助け合える方法をみつめていくところから始めるしかないのではないのでしょうか。

北沢 地域コミュニティが崩壊して人間が個々バラバラに孤立している。地域に代わって関心を共有するコミュニティをつくっていくのいい。このフォーラムもそうしたネットワークづくりを目指したいですね。

青木 ちよつと見えてきた。多くの人々の皮膚感覚的感性を、意識のレベルまでどうやって持ち上げるか、それがこの会の目標ですね。

「知と文明のフォーラム」にできること

森 結論めいたものが出たようですが、締めくくりとして、われわれのフォーラムで具体的に働く場を想定するのはいかがでしょうか。

片岡 (グローバルイズムと) 同じ土壌でなく、はずれても生きていけるっていう何かがほしいですね。

北沢 一九六〇年代末のヒッピー運動がそれだった。社会のなかで、社会のシステムから意識的にはずれる。消費者も生産者も、今ある社会のシステムの中で、生活をどう変えていくかという方策を考えてみないといけない。

たとえば農業。グローバルイズムの要求に従っ

「知と文明のフォーラム」に期待する

(ご支援いただいている先生方からのメッセージ。五十音順)

大内 秀明 (経済学)

米大統領選でオバマが健闘している。いささかポピュリズムも感ずるが、「チェンジ、チェンジ」の変革の訴えに共感してしまう。グローバルに拡大した「市場と資本の論理」が、家族や村落や自然環境を、ことごとく破壊した。人類存亡の危機が、近代文明の危機と直結している現実を、今ほど実感した経験がない。フォーラムが、近代文明の危機の深層を抉り、精神力と身体力から、新しい文明社会の創造を担いうるか。大きな期待を寄せている。

坂本 義和 (国際政治学)

かつて拙宅の近くに住んでおられた北沢さん。青木さんは、レックスという同居人(シエパード)と文字通り家の中で共生しておられ、「いのち」を感じさせる不思議な家族でした。「知と文明」という難しい問題には、私は門外漢ですが、「いのち」の意味を模索し続ける営みが「文明」なのだろうと思っています。しかし、その模索をいつまで続ける時間が私たち人間に残されているのかは、「知」にかかっていると考えるしかありません。

column

いつか醒める夢

戦後生まれの私は、自由・平等、そして基本的人権という民主主義の価値観を学びながら大人になった。同時に日本は経済成長を遂げ、次々と新しい科学技術が生まれ、地下資源を多用することによる豊かで便利な消費社会となった。二十歳になった頃から、現代文明の持つ負の面が少しずつ明らかになってきた。日本では公害問題、世界では南北格差があるといったような…。

三十歳の頃、和歌山県の大和に旅行し、里山に、新築の家と昔ながらの家とが混在して建っている風景を見た。新築の家は周囲との調和を乱し酷く醜かった。新しいものほどいいという私自身のこれまでの価値観を最終的にひっくりかえしたのが、この体験だった。

現代文明はいつか醒める夢に似ている。持続可能ではないからだ。夢から醒めても、現代の社会システムは、複雑で巨大となり、東京暮らしの身には抜け出すことは難しいが、抜け出す道を一緒に探る仲間がいることは心強い。(大東)

て完全に自由貿易化してしまうと日本の農業は壊滅する。農業というよりも農村の在り方を変えなくてはならない。いま食料価格が高騰している原因のひとつは、食料からバイオエタノールを作るからで、それは世界の貧困層から食料を奪うことにもなる。バイオマス(有機廃棄物)から作ればいいが、問題はコスト、とくに人件費や輸送費です。昔の自給自足は労働が大変だ

篠原 一 (政治学)

近代の文明論のなかに、森岡正博『無痛文明論』があります。私は若干角度を変えて、「無痛文明」(アナルゲシア)ということを考えています。痛みを感じずにポピュリズムに移行しやすい形態のものを想定しています。ステイグレルの『象徴の貧困』という現象にも通ずるもので、近代社会の変容という歴史的状況との関係で追求しているかと思っています。もっとも、時間切れで、文字通り生理的痛覚を失って千の風になってしまふのではないかと恐れています。フォーラムが種々の観点から、現代文明の諸相を明らかにして下さることを願います。

杉浦康平 (グラフィックデザイン)

北沢方邦さんは、今日のさまざまな知の世界を横断する鋭い分析力を持ち、たがいに先鋭化して分断されがちな諸領域を自在に結び、独自の統合力を身につけておられる。構造人類学を出発点としながら、地球上に響くさまざまな楽の音にも耳を傾け、日本の神話や四季のうつろひに感性をひらく。一方で、ハタ・ヨーガの優れた実践者としても知られている。まるで、無数の根を張りだして地中の蛇たちを活気づけ、その枝ぶりを空中にひろげて天の鳥たちを憩わせる、一本の大樹、生命樹を見る思いがする。いまなお瑞々しく感性をとぎすまず「知と文明」のフォーラムの試みに、耳を傾けたい。

「知と文明のフォーラム」の歩み

二〇〇六年

三月一八・一九日 第一回セミナー「ヨーガとインド哲学」

（講師：北沢方邦。身体と思考を不可分に結びつけるヨーガとその実践）

五月二七・二八日 第二回セミナー「性差とジェンダー」

（講師：青木やよび、北沢方邦。ジェンダー＝性別役割の図式化から脱却する、性差・ジェンダー概念の見直し）

七月一五・一六日 第三回セミナー「ヨーガとインド哲学②」

（講師：北沢方邦。近代二元論を克服する道としてのヨーガとその実践）

一月二五・二六日 第四回セミナー「野生の思考」

（講師：杜こなて、青木やよび、北沢方邦。西アフリカの音の文化。北米先住民ホビ、ナバホの宇宙論）

二〇〇七年

二月二日 第五回セミナー「レクチャー・コンサート

「不滅の恋人にみるベートーヴェンの変貌」

（講師：青木やよび、楽曲解説：北沢方邦、ピアノ演奏：パーク・ヨソビ。会場：ルーテル市ヶ谷センター）

三月三日 第六回セミナー「シンポジウム

「北欧型教育と日本の教育」

（講師：伊藤美好、佐藤全、古山明男、リヒテルズ直子。個別教育を中心とする北欧型教育に学ぶ。会場：日本女子大学）

十月二二・二四日 第七回セミナー「性差とジェンダー②」

（講師：青木やよび、北沢方邦、杉山直子。脳の性差および文化と思考の問題。アメリカ先住民女性の文学とジェンダー）

●今後の活動予定

二〇〇八年

四月一九日 第八回セミナー「レクチャー・コンサート

「世界音楽入門&西村朗の夕べ」

（講師：北沢方邦、西村朗。演奏：上野信一、蛭多令子、藤本隆文、松永加也子、上野信一&フォニックス、レフレクション。会場：セシオン杉並）

六月二四・二五日 第九回セミナー「食料・身体性・環境セミナー シリーズ」

（講師：安田節子、青木やよび、北沢方邦。場所：伊豆高原ヴィラ・マリーヤ。ヨーガと東洋医学の実習あり）

九月二〇・二二日 第十回セミナー「宮沢賢治とウィリアム・モリス」(仮)

（講師：大内秀明、北沢方邦。場所：伊豆高原ヴィラ・マリーヤ）

知と文明のフォーラム発足にあたって

これはいまだ誰も感じていることですが、環境破壊やそれにもなう異常気象、それらを推進している経済的・政治的グローバリズム、そこから派生する戦乱やテロリズム、国内的・国際的貧富の格差の拡大と人心の荒廃、増大する犯罪と疾病、各地域のゆたかで多様な文化の崩壊など、頂点に到達したはずの近代文明の未来、あるいは人類そのものの未来には、なにひとつ明るい見通しはありません。世界はいま、急激に悪い方向に向かっているとしか思えない状況です。

しかしそれに対して、グローバリズムを押し進めてきた政治的新保守主義（ネオ・コンサヴァティヴィズム）や経済的新自由主義（ネオ・リベラリズム）を批判することで、文明の方向転換をはかろうとしても、同じ近代主義あるいは近代性の土俵で格闘するかがり、出口はなく、迷路でさまようだけで終ることになるでしょう。

私たちは、かつて多くの賢者たちが警告したように、一度近代性の土俵の外に立ち、現状のよってくる所以を確認し、そのうえで未来への方向性を見いださなくてはならないのです。

その出発点は、これまで省みられることのなかつ

た「身体性」にあります。これは、現在見られる、健康ブームや、知育よりも体育を尊重せよといった意味での「身体」ではありません。長いあいだ観念だけの思想に頼り、「人間精神」をささえる手段でしかなかった「身体」、または「自然」を問いなおすことを意味します。具体的には、私たちが取りこむ最初の自然である大気や食を通じ、また自己の身体のもつ自然の力を喚び起こすことによって、人間と大自然および宇宙との関係を問いなおすことから始まりま

その上で、それによってえた認識を、さまざまに非近代や古代の知、あるいは諸々の芸術などから学びながら、近代性が生み出した矛盾を根源から批判する「知」にまで高め、それを、「文明」を新しい方向に転換する梃子としなくてはなりません。

私たちの運動を、「知と文明のフォーラム」と名づけたゆえんはそこにあります。

私たちはここで、上記のように身体や感性の鍛錬からはじまり、最新の科学的認識にいたる人間の全体的な知を探求し、またそうした表現の場を、自由で友愛的な人間関係の中でつくりだしていきたくと考えています。このフォーラムをどのような創造的な場としていくかは、メンバーや参加者の意欲と意志にかかっています。

事務局より

よのくを会し私くなや
発これ社談オリの多んマ
足しな催座つきこにそマ
ラマナや催社座つきこにそマ
フォーラムの開催に際しては、お忙しい中にもかかわらず、お言葉をいただきました。誠にありがとうございます。今後の活動も、どうぞよろしくお願いいたします。

大内秀明、坂本義和、篠原一、杉浦康平の各先生方には、お忙しい中にもかかわらず、お言葉をいただきました。誠にありがとうございます。今後の活動も、どうぞよろしくお願いいたします。

本頁に、知と文明のフォーラム2年間の歩みと、発足にあつたての文章を掲載しました。ご参考になればと思います。

当フォーラムでは「知と文明のフォーラム」の準備がすすんでいます。厚利伊のいみ読みを、どうぞご活用ください。